

TUFS Cinema『炎／Sholay』上映時に寄せられたご質問について

2025.7.13 松岡 環

6月14日(土)には、TUFS Cinemaの『炎／Sholay』(1975)上映にお運び下さり、ありがとうございました。上映後に解説をさせていただいた松岡です。私の仕事の都合で、ご質問への回答が遅くなりましたこととお許し下さい。

『炎』は3時間24分という長尺の作品でしたが、皆様熱心に見て下さり、今回は今年の『マダム・イン・ニューヨーク』以上にたくさんのご質問を頂戴しました。1枚の質問用紙に複数のご質問を書いておられる方がほとんどで、数個書いておられる方も多かったため、それぞれのご質問を切り離して並べるとすごい数になってしまうことから、同じようなご質問はまとめて回答する形にしています。実際に提出して下さった数としては、質問票が37枚で、あとアンケート用紙に質問を書いて下さったものが2枚です。簡単にはお答えできないご質問が多く、回答も長文になったものが多いこととお許し下さい。

なお、ご質問の文章中の誤表記等は、一部こちらで直させていただきました。悪しからずご了承くださいただければ幸いです。

* * * * *

《作品の細部に関する質問》

【質問1】 End Roll のなかに”Selfmade Waterphone”という表記があったと思います。何かペンネームかニックネームかと思いますが、もしかすると何か当時の映画の技術？と思い、一寸気になりました。

【回答】ウォーターホーンは私も知らなかったのですが、金属で作られたパイプ楽器です。右写真は、Wikipedia”Waterphone”からですが、中に水を入れて効果音を出すのに使われることが多く、ホラー映画を中心によく使われているそうです。詳しくは、下の Wiki をご覧下さい。「selfmade」なので、市販のものではなく、演奏者が独自に作った楽器かと思われます。



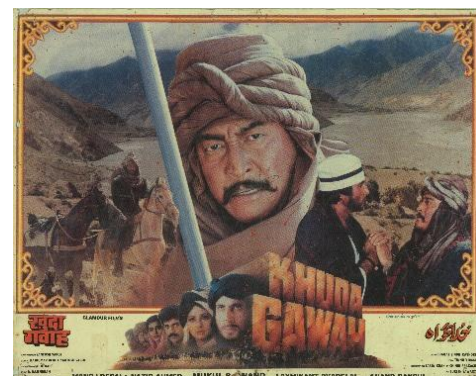
<https://en.wikipedia.org/wiki/Waterphone>

【質問2】 BGM ハーモニカの演奏は、どなたでしょうか？

【回答】 エンドクレジットには、「Mouth Organ and Whistle(ハーモニカと口笛)」として、Pradeep Suri と V.S. Shirali という名前が上がっています。プラディープ・スーリーという名前を検索すると、俳優、歌手、音楽エンジニアなどが引っかかってきますが、どの人かは特定できませんでした。V.S.シラーリーという名前は、ヒットしてくる人物がいませんでした。Mouthorgan は口琴にも使われる英単語ですが、他にクレジットで該当するものがなく、これがハーモニカ演奏者のクレジットだと思います。

【質問 3】 ガッバル・シンの最初の俳優はどなたですか？

【回答】当時悪役を得意としていた男優ダニー・デンツォンパ (Danny Denzongpa) だったそうです。シッキム出身の俳優で、プネーの映画 TV 研究所を卒業しており、悪役以外にも準主役級俳優としてもいろんな映画に出ています。最近の作品では、『マニカルニカ ジャーンシーの女王』(2019)、『バンバン！』(2014)、『ロボット』(2010)等に顔を出しています。右の写真は『Khuda Gawah(誓い)』(1992)のロビーカードです。



©NFAI

《作品の舞台に関する質問》

【質問 4】 舞台はどこら辺でしょうか？

【質問 5】 撮影場所はインドのどの地域でしょうか。

【質問 6】 舞台になった西部劇風の村は実在ですか？

【質問 7】 村は、どの地方という設定でしょうか？(又は、観客は、どこだと思っていたか)

【質問 8】 <アンケート用紙より> 撮影地はどこですか？(ロナウラの近く?) 季節がわかれば教えて下さい。

【回答】上記 5 問、まとめてお応えします。ダコイト、あるいはダークーと呼ばれる盗賊たちは、北インドのウッタル・プラデーシュ(UP)州西部からその南部マディヤ・プラデーシュ(MP)州北部にかけて広がる、チャンバル溪谷に多く住んでいる、と考えられていました。本作のガッバル・シンという名前の元となった実在の盗賊ガッバル・シン・グッジャルも、MP 州のグワリオルあたりが本拠地だったそうで、観客も「ダコイトと言えばチャンバル溪谷」と連想していたと思います。ただ、実際に撮影が行われたのは南インド、カルナータカ州のベンガルール西南方にある町ラーマナガラ近郊の岩だらけの荒野で、そこに村全体のセットが建設され、ロケが行われました。撮影は乾期に入った 1973 年 10 月 3 日に始まり、凝った撮影のため各シーンとも時間がかかったようです。もっと詳しく知りたい方は、下の Wikipedia"Sholay"を読んでみて下さいね。というわけで、マハーラーシュトラ州のロナウラ近辺ではありませんでしたが、同じ西ガーツ山脈の連なりの中、ということで、似た地形が見られたのでは、と思います。

<https://en.wikipedia.org/wiki/Sholay>

《内容に関する疑問》

【質問 9】 最後に「炎」のシーンが出てきますが、この「炎」は火葬の意味でしょうか。あるいは「炎」とは宗教的、または、慣習としてどんな意味があるのでしょうか。

【回答】『Sholay』の英語タイトルは「Flames of the Sun」です。従って、「ショーレー（原形は“ショーラー”）」のイメージは、灼熱の太陽の炎です。それをイメージして、この映画のレコードジャケットには灼熱の太陽を大きく描き、その隅に踊るバサンティを配したものが使われています。つまり、バサンティがヴィールの命を助けようと、裸足で岩の上で踊る時に照りつける太陽の強烈な光が、“ショーレー（炎）”のイメージするものです。

ジャイの火葬のシーンは、「ショーレー（ショーラー）」という言葉とは関係がありません。「ショーラー」の語源はアラビア語なので、ヒンドゥー教徒の火葬を表現するにはふさわしくなく、火葬の火の場合は「アグ」という単語を使います。「炎＝ショーレー（ショーラー）」という言葉は、宗教的にも慣習としても特に意味を持つものではなく、即物的な意味しかありません。

【質問 10】 馬がずいぶん転ばされていましたが、ケガして殺処分！？と「かいうことはなかったんでしょうか？ 最近のインド映画では「動物は傷つけていない」という文が出ていたり、動物自体が作り物の CG だったりするので気になりました。

【回答】当時は、「動物は傷つけていません」という断り書きは出ませんでした。この断り書きはアメリカ映画が手本ですが、アメリカでは 1936 年から監視が始まったものの、一度 1968 年に廃止され、1988 年からまた監視を始めた、ということが下のサイトに載っていました。

「映画エンドクレジットにある「動物を傷つけていません」の意味と歴史。誰がどうやって評価する？」 <https://cinemandrake.com/no-animals-were-harmed>

『炎』での馬のケガ等に関しては、何も記録が見つけれず不明です。

【質問 11】 <アンケート用紙より>この映画が作成された時代、スタントマンという概念はあったのでしょうか？ 養成学校などあるのでしょうか？ 馬から落ちたり、高い所から落ちて転がっていた人の無事を祈りながら見ていました。

【回答】スタントマンは映画の初期から存在しており、『炎』のアクション・シーンでもよく登場しています。特に、ホーリー祭後の村の広場での銃撃戦シーンでは、2 人のスターのスタントマン登場がはっきりとわかります。スタントマン養成学校は現在ではインド各地に存在し、バイク・アクションあるいはカー・スタントに特化した学校など、様々な学校が存在します。Netflix のドラマ『ムンバイ・フィクサー (Rana Naidu)』(2023)の中で、ラーナー・ダッグバーティ演じる主人公の兄がアクション監督をやっており、スタントマンを養成しているシーンがありました。昔はそんな形でアクション監督のもとで修行していたのでは、と思われます。アクション監督は、以前は「Fight Master」とか、あるいは単に「Fight」「Thrills」といったタイトルで名前がクレジットされていましたが、今は「Action」「Stunts」等のクレジットで名前が出てきます。IMDbによると、『炎』のアクション関係者でわかっている人は次の 3 人のようです。

- ・レーシュマー・パターン〜ヘーマー・マーリニーのスタント・ウーマン
- ・ムハンマド・アリー〜スタント・コーディネーター(クレジットなし)
- ・ゲーリー・克蘭プトン〜アクション・コーディネーター(クレジットなし)

【質問 12】 字幕で“村長”になっていた Thakur は、人名でしょうか？ Thakur Anoop Singh という俳優がいるのですが、Thakur 自体が何か村長的役割り(カーストなどでの位置とか)を表すのかな？ と気になりました。

【回答】「タークル」は封建時代の一種の称号で、身分の高い人や大地主などを呼ぶ時につける敬称として使われました。現代ではそれが姓として定着したりもしており、ベンガルの作家「ラヴィーンドラナート・タゴール」はベンガル語で言うと「ロビンドロナト・タークル(タクル)」となります。本作では、「地主様」と訳すのも変なのと、実質村長的役割を果たしていることから、「村長」という字幕にしました。

【質問 13】 バサンティがガッバルの前で踊るシーンがありましたが、個人的にインド人は踊るのが好きなのに踊るのをはしなないと考える傾向があるのかな？ と思います。バサンティがガッバルの前で踊るということは社会的にどういった意味を持ちうるのでしょうか？

【回答】 ここの状況は、ガッバルが村娘をさらってきて、自分の性的欲望を満たす前段階として踊りを強要しています(その後レイプされることは明らかです)。いくら踊るのが好きだと言っても、セクハラ一直線の状況下で踊る、というのは嫌悪しかないとします。「はしなない」という恥じらいよりも、嫌悪感がバサンティからは発散されていたと思いますが。

【質問 14】 ジャイが亡くなってしまったのに驚きましたが、結果ラダーとも結ばれず、これは寡婦の再婚がそれだけタブーだったということだったのかが気になりました。

【質問 15】 現実のインドで未亡人の方が結婚することはできるのでしょうか。また、現代でも白いサリー、装飾品なしなのでしょうか。

【回答】 寡婦についてのご質問なので、一緒にお答えします。私も映画の中でしか、インドの寡婦の人たちのことについては知らないのですが、1950～80 年代の映画に登場する寡婦は、白いサリーをまとい、装飾品を一切付けない姿で描かれました。大女優ミーナークマリー主演映画『Phool Aur Patthar(花と石)』(1966)では、未亡人である主人公は彼女を助けてくれた前科のある青年(ダルメンドル)と結ばれそうな未来が暗示されて終わりますが、私の知る限りでは、未亡人が再婚する映画はありませんでした。その後、映画の中の未亡人の服装は無地(ブルーなど)のサリーとかになり、近年は『ガンジスに還る』(2016)や『サントーシュ』(2024)のように、普通の女性と変わらない服装となってきました。

寡婦の再婚については、1970 年代当時ムンバイ(当時はボンベイ)在住の私の知人たちは、全然タブーではない、という立場でした。というのも私自身が当時寡婦だったためで、「早く次の相手を見つけなさい」といつも勧められました。多分、その人の暮らす環境や背景によって認識が異なっていたのだと思いますが、映画では一般大衆のモラル基準に合わせ、かなり保守的に描かれていたのだと思います。

『ガンジスに還る』 水色に花の刺繍のサリー⇒

© Red Carpet Moving Pictures



【質問 16】 最後は法に委ねるという作品のメッセージとは？

【回答】 このラストは、インドの中央映画検定局(CBFC=Central Board of Film Certification)によって変更させられたものです。当初のラストは、タークルがガッバルと闘ってガッバルを痛めつけ、柱に突き出ている釘にガッバルが身を寄せる結果になり、その釘が突き刺さって死亡する、というものでした。YouTube にはそのシーンがアップされています。

<https://www.youtube.com/watch?v=IQwaj58BuS4>

これが残酷と判断されたため、「悪人はやはり法によって裁かれねばならない」という判断で、現在のようなラストにかわったのです。先日、イタリアのボローニャで修復された『炎』が上映され、「ディレクターズ・カット版」ということで、元のラストで上映されたそうです。

【質問 17】 インドの観客の皆さんは、登場人物の誰に対して、特に共感しているのでしょうか？ やはり主人公の2人でしょうか？

【回答】 おっしゃる通り主人公の2人ではないかと思いますが、そういう観客意識調査などはされたことがないので不明です。

【質問 18】 50 年前の映画が、映画のレジェンドとしていまだに語りつがれているのは、インド人の生活に根ざしたものがあると思いますが、それはどんなものですか。

【回答】 『炎』をご覧になって、「生活に根ざしたもの」をお感じになりましたか？ 映画は非日常が描かれるから印象に残る場合もあり、また、極上の娯楽作品なのでいつ見ても心が高揚する、ということで人々に愛されている作品もあります。あまり堅苦しい見方をなさらず、「すみずみまで娯楽要素が詰まっているので、みんなに愛され、語り継がれているのね」ぐらいに思っただけだと、作品も喜ぶと思います。

【質問 19】 これは当時の現代劇なのでしょうか。『荒野の七人』っぽいと思うシーンは確かに多々あったのですが、実際のインドにあの西部劇のような馬を走らせ盗賊がいてという文化はあるのでしょうか。

【回答】 『炎』はその当時の現代劇として描かれています。1975 年当時はまだダコイトが各地に出没していた時代で、警察は彼らを投降させ、政府の威信を示すことを目指していました。盗賊たちの首領は馬を使って移動していたようで、警察側もジープでは行けないところもあり、馬を使っただけの追跡劇もあったようです。それを「文化」というのは少々変だと思いますが、北インド、南インド共に名の知られた盗賊が複数存在し、警察が掃討作戦を繰り返していました。成果をあげた時には、投降したダコイトと共に、警察幹部や警官がそこに入って撮った記念写真を、新聞報道に使ったりしていたものです。日本では、実在の女性ダコイト、プーラン・デーヴィーの映画がかつて公開されており、ソフトも出ています。それをご覧いただくと、いろいろおわかりいただけるかと思います。



【質問 20】 ガッバル・シンのセリフがなぜ有名なのか、よくわかりませんが、インドの人達の心をうつものがあるのでしょうか？

【回答】 心をうつというわけではなく、ふとした時にアレンジして使うのに適しているからではないかと思います。それと、インド人がほぼ全員知っているので、使うと笑いを誘ったり、「うまいこと言うなあ」と感心されたりするからでしょう。我々が、流行語や芸人の得意なフレーズ、あるいは流行歌の一節をウケ狙いで使ったりするのと同じことだと思います。

【質問 21】 監督、脚本家、そして主役の役者さんたちの肌の色が白い人たちが主であるように思いますが、これはインドの人種の階級構造を反映しているのでしょうか？

【回答】 「人種の階級構造」という表現がよくわからないのですが、インド人の身体的特徴にカースト制度が多少なりとも関与しているとは言えると思います。何世代にもわたって、戸外での労働に従事してきた人々と、室内で知的職業に従事してきた人々は肌の色が違うことが多いですし、また、栄養の十分行き渡る食事をしてきた人々と、十分な食料が得られない生活を強いられてきた人々とは体格が違ったりします。もちろん例外もあるのですが、おっしゃる通りだと思います。

《『炎』が影響を受けた映画等に関する質問》

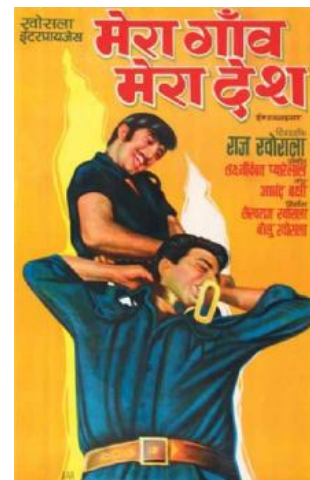
【質問 22】 もちろん、今の映画とだいぶんづくりがちがうと思いましたが、特に銃撃のシーンは、西部劇のようでした。何かそういった要素も意識して入れられていたのでしょうか？

【回答】 お話したように、監督はハリウッド映画『荒野の七人』(1960)を参考にして本作を作っています。また、1960年代半ばからイタリア製の西部劇が人気となり、ハリウッド・スターのクリント・イーストウッド主演でイタリアのセルジオ・レオーネが監督した『荒野の用心棒』(1964)が大ヒットし、世界的にブームを巻き起こしました。インドでは、当時はいわゆる洋画がほとんど一般公開されておらず(洋画の輸入上映は、①上映権料が高い、②英語等外国語の映画なので楽しめる人が少ない、③なじみのない俳優なので客の関心を引かない、④インド人の感情にフィットしないものが多い、等で非常に限られていました)、インド映画にその要素を取り入れて製作し、インド人観客に見せる方法が一般的でした。というわけで、監督と脚本家はこれら「スパゲッティ・ウェスタン」(日本では「マカロニ・ウェスタン」)映画の要素も取り入れて、本作を作った、とされています。

【質問 23】 この映画はその後の映画にたくさん引用されていますが、この『炎』という作品内にそれ以前の作品の影響は見られるのでしょうか？

【回答】 アスラーニーが演じたヒトラーみたいな刑務所長は、チャップリンの『独裁者』(1940)を思い出させますし、前述のような日本では「マカロニ・ウェスタン」と呼ばれたイタリア製西部劇の諸作品からの引用を指摘する声もあります。また、インドではダコイトを主人公にした映画

が昔からいろいろ作られているのですが、それらの映画との相似点を指摘する評論家もいます。『炎』の Wiki の項目「Development」に、参考にしたと思われるいろんな作品名が上がっていますので、ご興味があれば調べてみてください。そこに上がっているインド映画は、『Mera Gaon Mera Desh(私の村、私の故郷)』(1971／右)はじめ、ほとんどが YouTube で無料で見られます。字幕はないものが多いですが、ご覧になると、ここのプロット、あるいはシーンを『炎』は真似したのでは、というのがわかったりします。



Wiki より

《公開時の反応等に関する質問》

【質問 24】 Sholay の現地公開初期には盛り上がりがいまいちだったというのは、公開前の話題性が低かった等の理由なのでしょうか？ 観客があまり見たことのないタイプの作品だったのでしょうか。『バーフバリ』も公開直後は地元テルグ圏の反応がいまいちだったという話を聞いたので、どういう現象なのか気になります。

【回答】 1975 年当時インドではまだテレビが普及しておらず(テレビ受像機が高価だったため普及率が低く、しかも 1982 年にやっとカラー化したので、長らく白黒テレビだった)、映画の宣伝手段は新聞やラジオ、ポスター、街頭宣伝などでした。しかも、映画評論家は『炎』を全然評価しなかったため、評判が伝わることもなく、3 週目ぐらいにそれまで見た人が「おもしろい」と言っている口コミが広がって、やっと客足が伸び始めた、というのが『炎』ヒットの始まりでした。『バーフバリ』は 2015 年の作品なので、また違う要因だったのではと思います。

【質問 25】 公開当時の出来事で印象的なことなどがもし他にもあればおうかがいしたいです。また、当時の人気のキャラクターかその人気のほどについても、もし他にも(資料のガッバルのお菓子広告についてのお話が興味深かったので)あれば知りたいです。

【回答】 公開当時ではなく 1997 年ですが、『炎』は現代アートの作家アトゥル・ドディヤ(Atul Dodiya)によって、「ガンボージ色(濃い芥子色)のガッバル」というタイトルで現代絵画になっています。福岡のアジア美術館に所蔵されており、下記のサイトで作品の写真を見ることができます。 <https://faam.city.fukuoka.lg.jp/collections/2658/>

「当時の人気キャラクターかその人気のほど」と言われても、私は当時インドに住んでいたわけではなく、年に 1 回インドに行くだけだったので、映画以外の世情はよくわかりません。思いつく人気者は、新聞連載の R.K. ラクシュマンによる一コマ漫画のキャラクター「The Common Man(一般人)」(右の切手に出てくるおじさん)ぐらいですが、連載紙の「The Times of India」の販促等には登場していたかも知れませんが、他の CM などに登場したりはしなかったの





ではと思います。あと、1975 年は、インディラー・ガーンディー首相が 7 月に初めてエマーゲンシー(非常事態宣言)を発した年なのですが、彼女の施策実現のために、家族計画に使われた標語とそのキャラクターがあふれました。標語は「Hum Do Hamare Do(私たち=夫婦は 2 人、私たちの=子供も 2 人)」で、左のような、大人 2 人と子供 2 人の絵がオートリキシャ(現トゥクトゥク)の背面や街角などにもよく描かれていました。人気キャラクターとは到底言えませんが、50 年前はそんな時代だったのです。

《南インドでの公開や影響について》

【質問 26】 インド全土で上映されたようですが、ヒンディー語版が上映されたのでしょうか(南部などでも)?

【質問 27】 『RRR』の Dosti のシーンなどもこの『炎』(Sholay)の影響であるとよく聞きますが、南インドではこの『炎』という映画はどのように受け取られているのでしょうか? やはりとても人気なののでしょうか?

【質問 28】 先生のコラムなどで『炎』の初上映のヒットなどは理解しましたが、西部、南部等の非ヒンディー語圏での『炎』の受け入れ方はどのようなものだったのでしょうか? 北のヒットですぐに吹替が出たのでしょうか?あるいは TV 放送などでしばらくたって知られるようになったのでしょうか? 実はいまだに「タイトルは知ってるけど見たことない。」人がいるとか、言い方をかえると「70 年代アミターブ・バッチャンや '90 年代シャー・ルク・カーンはどのように全インドのスターになったのでしょうか?」です。

【回答】 内容が共通するご質問ですので、一緒にお答え致します。1975 年当時、インドでは自国映画を吹き替えで上映する、ということはありませんでした。特にヒンディー語映画は、ヒンディー語がインドの公用語であるため、インド人ならわかるはず、という前提のもと、そのままインド各地で上映されていました。『炎』の場合は、ある程度ヒンディー語がわかれば十分に楽しめますし、また、当時のセリフはアフレコということもあって、俳優の発音が明瞭で、非ヒンディー語話者(たとえば私)にもよくわかりました。というわけで、非ヒンディー語圏の人々も『炎』を十分に楽しんだはずで、南インドでも、ハイダラーバード周辺はヒンディー語というかウルドゥー語がよく通じる地域で、ヒンディー語映画にとっては重要な興収獲得地域でした。日本人は「完璧にわからないとダメ」という意識が強いと思うのですが、「だいたいわかる」でも映画は十分楽しめます。私自身を振り返っても、タミル語など全然わからないのに、父(アッパー)、母(アンマー)、兄(アンナー)、姉(アッカー)、という単語だけ覚えて行けば人間関係はわかったので(笑)、21 世紀になって英語字幕が入るようになるまでは、それで映画を楽しんだことを思い出します。

もちろん、「タイトルは知ってるけど見たことない」という人もいますが、ヒンディー語圏でヒットした作品は非ヒンディー語圏でも人気があり、それゆえにアミターブ・バッチャンやそれ以前のラージェーシュ・カンナー、以後のアニル・カプールやシャー・ルク・カーン、アーミル・カーンらの主演作を南インドの観客も大いに楽しんだことは、南インドの各都市でもヒンディー語映画がたくさん公開されてきたし、公開され続けていることからわかります。

南インド諸言語の映画が、「地方区」から「全国区」になってボリウッド映画と競い始めたのは、ヒンディー語吹き替え版が盛んに作られるようになった 2010 年代で、特に『バーフバリ 伝説誕生』(2015)がヒットして以降です。

『RRR』(2022)で S.S.ラージャマウリ監督は、挿入歌に「Dosti」、「Sholay」というタイトルを付けていますが、前者はテルグ語版、ヒンディー語版、カンナダ語版のみですし、後者はヒンディー語版だけです。映画『炎』に思い入れがあって作ったとは思われないのですが、監督が『RRR』を語る中で『炎』にも言及し、2 曲の題名の由来を『炎』からだ、と述べたのでしょうか。もし、そういうインタビュー記事等があるなら、ご教示下さるとありがたいです。

《パキスタンでの公開について》

【質問 29】(前置きのご説明略)Sholay のパキスタンでの評判・ロングラン記録やパキスタン映画・ドラマに与えた影響など、もしご存じでしたら教えて下さい。

【質問 30】『炎』のパキスタン上映はあったのですか？

【回答】パキスタンで『炎』が正式に上映されたのは今から 10 年前、2015 年 4 月のことでした。下記にアドレスを付けた記事では、カラチで著名人が出席する大規模なプレミア上映が行われた、と伝えています。また、ある映画評論家は、「パキスタンには『炎』のファンはたくさんいる。パキスタンでの上映が許されなかった時代、ビデオでインド映画を見た世代がファンになったのだ。今の若い世代も、両親や目上の人々から『炎』のことをよく聞かされて育っているので、今回見てすぐに魅了されたことだろう」と語っています。

<https://www.ndtv.com/entertainment/sholay-releases-in-pakistan-40-years-after-it-was-made-756137>

私が 1979 年にパキスタンに行った時、『炎』の海賊版は目にしませんでした。アミターブ・バッチャンら 5 大スターが共演した『Kabhi-Kabhie(時として)』(1976)等のサントラ盤レコードがジャケットもそのままコピーされて、市場に出ているのを目にしています。1970 年代から始まったビデオ時代は、その後 1980 年代に入って、インドで多くの違法ダビングソフトを生み出し、レンタルビデオ店が栄えました。その手のビデオはパキスタンや欧米諸国にも送られ、パキスタンの人々も『炎』を楽しんだのでしょう。ただ、パキスタン映画には「インド映画を勝手にリメイク」作品が結構あるのですが、『炎』のリメイクはググっても出てきませんでした。

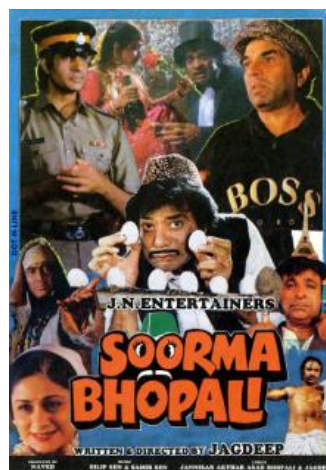
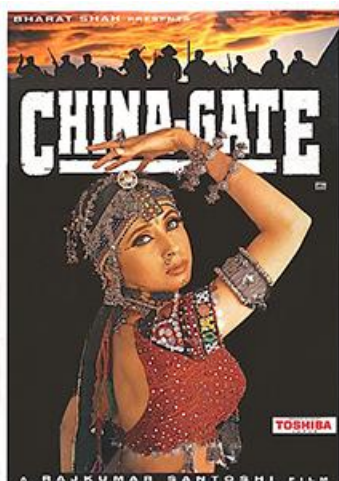
《『炎』のリメイクについて》

【質問 31】 インドでは人気作品はよくリメイクなどを作られるイメージがあります。この映画もリメイク作品などは多く作られたのでしょうか？

【質問 32】 『炎』のリメイク版(タミルやマラーラム等の)はあったのですか？

【質問 33】 調べると『SHOLAY 2』の情報が出てくるのですが、続編はあるのですか？

【回答】 『炎』のリメイクは、パロディも入れるとたくさんあります。正式なリメイクというか、元のハリウッド映画『荒野の七人』を元に作られたのは、ラージクマール・サントーシー監督の『China Gate(チャイナ・ゲート)』(1995)で、アムリーシュ・プリーら脇役俳優の有名どころが大挙して出演しました。また、ラーム・ゴーパール・ヴァルマー監督が自身の名を冠した『Ram Gopal Varma Ki Aag(ラーム・ゴーパール・ヴァルマーの火)』(2007)では、マラーラム語映画のスターであるモーハンラールが警部役、アミターブ・バッチャンがバツバン・シンという盗賊役を演じています。詳しく知りたい方は、映画のタイトルを入れて検索すれば Wiki が出てきますし、YouTube には予告編、時には本編がアップされていますので、見てみて下さい。



(画像はすべて Wiki)

その他、スールマー・ボーパーリーを演じた喜劇俳優ジャグディーブが、『Soorma Bhopali(スールマー・ボーパーリー)』(1988)というスピンアウト映画を作り、ダルメンドルやアミターブ・バッチャンがカメオ出演しています。近年では、テルグ語映画界の人気俳優パワン・カリヤーン主演作『Gabbar Singh(ガッバル・シン)』(2012/上の一番右のポスター)がヒット作となっていますし、同じくパワン・カリヤーン主演の『Sardar Gabbar Singh(親分ガッバル・シン)』(2016)という映画も作られています。その他、パロディ作品も山ほどありますが、めぼしい作品は上記です。

『Sholay 2』は、検索すると報道記事らしきものが出てきますし、予告編らしきものも見られますが、全部フェイクだと思います。特に予告編は、YouTube 上に死ぬほどアップされている「Fun made(ファン製作)」予告編レベルなので、誰も信じないのではと思います。

《映画に登場するヒンドゥー教徒とムスリム(イスラーム教徒)について》

【質問 34】 イスラム教の導師が登場された背景は何でしょうか？ イスラム Vs ヒンドゥー??

【質問 35】 舞台となった村にムスリムの家族がいるということ、精神的な支柱がムスリムの導師というのは、どのような意図があると考えられますか。また、村の中でムスリムの家族が共存するというのは、よくあることなのでしょうか。

【質問 36】 村の中にイスラム寺院が有って、導師様とヒンドゥーの人々からも尊敬されていましたが、1975 年当時のごく普通にそれがあったのか、映画での理想的な姿なのか、知りたいです。

【質問 37】 村ではホーリーを祝っていましたが、イマームも尊敬されていました。この村には、ムスリム、ヒンドゥー教徒が共存しているということでしょうか。

【質問 38】 宗教が複数まざりあっていて、例えばバサンティはモスクにも行き、シヴァ神へも祈りに行っており、それは問題無いのでしょうか。

【質問 39】 イマームがおり、モスクがあり、アザーンが流れていたのに、イスラム教の村かと思ったが、ホーリー祭も行われていました。ジャイの遺体も焼かれていましたが、ヒンドゥー教とイスラム教が混在しているのでしょうか。

【質問 40】 娯楽映画ですので気にする必要はないのかも知れませんが、村人の宗教はヒンドゥー教とイスラム教を信じる人が混在しているように思われるのですが、これはよくあることなのでしょうか。それとも、両方の宗教の信者たちに映画を観てもらうためにそう演出されたのでしょうか？

【質問 41】 イマームとヒンドゥー教徒が仲良くしていますが、この当時は、宗教対立は、今のようには激しくなかったのでしょうか。

【質問 42】 作品の中で村にムスリムの年配の偉い方(←ヒンディー語で何というのかわすれました)を描くのは？ どんな意味があるのか？

【質問 43】 村の導師様親子はムスリムですか？ 同じ村で暮らすこともあるのでしょうか。

【質問 44】 イスラーム教徒の役と表象についておうかがいしたいです。当時映画で、イスラーム教徒は役として登場するのは、スタンダードだったのでしょうか？ また、ショーレイにおけるイスラーム教徒の表象には特徴があるのでしょうか？

【回答】 今回非常に驚いて、かつショックだったのは、上のようなご質問がたくさん出てきたことでした。皆さんはインドに関心をお持ちの方なので、当然インドの宗教別人口の割合もご存じだと思いますが、日本の外務省のサイトにはこう書かれています。

ヒンドゥー教徒 79.8%、イスラム教徒 14.2%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.7%、

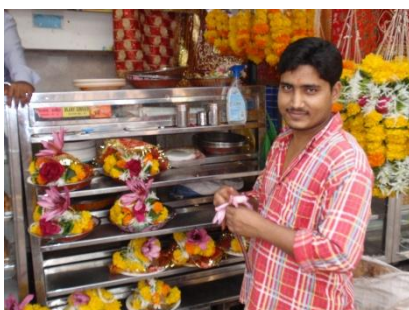
仏教徒 0.7%、ジャイナ教徒 0.4%

今回のご質問の中で多かったのが、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が同じ村に住んでいる、ということに対する驚きでした。では、いったい、インドでは人々がどのように暮らしている、と皆さんは考えているのか、宗教別に隔離されて暮らしているのが普通、とされているのか、と、正直唖然としました。

インドにいらしたことがある方なら、たとえばムンバイなら、ヒンドゥー教のマハー・ラクシュミー寺院からはイスラーム教の聖者廟ハッジ・アリー・モスクが見え、近くにはセント・ポール教会があって…と、いろんな宗教施設が混在していることをご存じだと思います。村も同じで、寺院とモスクとは大体どこの村にもあるのが普通です。それは、イスラーム教徒の人が住んでいるため、彼らが担っている職業、例えばノンベジの人のための肉屋とか、パターン人に代表される屈強な守衛とか、職能集団としての役割を担っているのです。『炎』にはイマーム一家以外のイスラーム教徒は登場していませんが、モスクがあることで観客は、一定程度のイスラーム教徒住民がいることを無意識のうちに認識します。

今回、皆さんが驚かれたことで、やはりここ 20 年ぐらいのインド映画の変化が、悪影響を及ぼしている、ということが証明されたような気がします。というのも、インドは憲法で、「世俗主義（セキュラリズム）の国家である」とうたっています。つまり、国としての宗教は定めず、どんな宗教の人も平等であることを宣言しているわけです。従って、インド映画の検定条項にも、「人種、宗教、その他の集団を蔑視する映像や言葉が提示されないこと」という条項が 1952 年から定められています。映画製作に携わる多くの人は今世紀になるまで、ヒンドゥー教徒しか登場させないのは他宗教に対する蔑視に当たると考え、なるべく多くの宗教信者を登場させるよう工夫してきました。

例えば、シャー・ルク・カーン主演の『ラジュウ出世する』（1992）では、主人公や恋人はヒンドゥー教徒ですが、近所のお茶屋はイスラーム教徒、そこのお客にはキリスト教徒がおり、ラジュウがバイトする図書館のオーナーはパールシー教徒です。また、アーミル・カーン製作・主演の『ラガン』（2001）では、イギリス軍将校と闘う村のクリケットチームはほとんどがヒンドゥー教徒ですが、イスラーム教徒もおり、またあとでシク教徒が加わります。彼らを助けクリケット技術を教えるのはイギリス人将校の妹で、キリスト教徒です。他にもたくさん例はあるのですが、こういう配慮が 21 世紀になると、つまり BJP が力を持つと、だんだん少なくなってきました。とはいえ、S.S.ラージャマウリ監督は『RRR』でビームのデリーの家族をイスラーム教徒にしていますし、ビーム自身にもムスリムの格好をさせています。また、『K.G.F: Chapter 1&2』（2018&22）では、K.G.F.を掌握したロッキーは、少数派であるイスラーム教徒達を尊重する態度を示します。こんな風に、現在でも世俗主義への配慮が生きているのですが、20 数年前と比べると圧倒的に少なく、皆さんの意識には多宗教の人々が存在するインド、という姿はインプットされてこなかったのでしょうか。（下はムンバイの寺院のお供え屋、モスク、教会）



ですので、村にモスクがあり、イマームがいて皆に尊敬されていることは、「どんな意味があるのか」どころか、ごく当たり前のことを描いたにすぎないのです。また、宗教的な背景がある祭りも、宗教に関係なく人々が祝うことは、今でも同じです。ヒンドゥー教徒の人々も、あのダルガーハ(イスラーム教の聖者廟)は霊験あらたかだと聞くと、熱心にお参りに行って祈りの紐を結びつけてきたりします。

しかし、ヒンドゥー教やイスラーム教に偏見のない日本人観客でさえ、こんな風に捉えるようになる昨今のインド映画は、イスラーム教ヘイトなどを目の当たりにしているインド人観客には、さらに偏見を植え付けていくかも知れません。長くなりましたが、今回の皆様のご質問がかなりショックだったため、危惧を吐露してしまいました。

【質問 45】 村人の唯一の犠牲者がムスリムの子供という意味は？

【回答】 イマームの息子アフマドを演じたのは、サチンというスクリーンネームで、子役からこの頃青年役になり始めた俳優でした。『炎』公開時が 17 歳で、同年秋に初の主演作でクリシュナ神話を下敷きにした『Geet Gata Chal(歌歌いつつ行け)』が公開され、大人気になります。アフマドはその死によって村が反ガッバルで一つにまとまる重要な役ですが、普通の農民の子よりも尊敬を受けているイマームの息子の方がより効果的で、イマームの言葉も重みを持つ、ということから、このプロットが生まれたのでは、と思います。ムスリムの子供だから殺す役にした、というよりも、前述のようないろんな点を勘案してのことではないかと思います。それと、村人の犠牲者では、先にタークルの家族が 5 人(大人 4 人、子供 1 人)殺されています。「村人の唯一の犠牲者」というのは正しくありません。

【質問 46】 イマームが登場し、息子もいましたが、宗教的指導者は結婚できるのでしょうか。それとも彼は養子なのでしょうか。

【回答】 イマームはもちろん結婚できます、というか、ムハンマド以降、後継者は血統によってつながっていくので、結婚なしには不可能です。イランの宗教指導者もイマームと呼ばれますが、モンタゼリ師は結婚して 7 人の子供がいましたし、ハメネイ師も結婚して 6 人の子供を作っています。アトランダムに Wiki を調べた結果なのですが、シーア派がそうでもスンニ派は違うのでは、と思われたら、すみませんがご自身で調べてみて下さい。私が調べた限りでは、「イマームは結婚が禁じられている」という記述は出てきませんでした。

《セリフのヒンディー語等の表現に関する疑問》

【質問 47】 今年東京外国語大学を卒業した者です(ウルドゥー語科)。初学者ながらこの映画を観て思ったのが、現代で聞くウルドゥー、ヒンディー語とは少し違うと感じました。(that 節に該当する ki と ke が混ざっている？ 勘違いでしたらすみません)現代とこの時代の言葉のちがい、どのように言葉が変容していったのかを教えていただけると幸いです。

【回答】 残念ながら私は言語が専門ではないのですが、この質問者の方が「違う」と感じられた原因は、いくつか思い当たることがあります。①映画のセリフは教科書ヒンディー語ではなく、一般の人々がしゃべる口語ヒンディー語になっている、②サンスクリット語系の単語より、アラビア・ペルシャ語系の単語が多く使われている、③村人や盗賊の言葉には、チャンバル溪谷あたりのなまりが加えられている(「z」音の「j」音化、などですね。マック・モーハン演じるサンバは「プーレー・パチャース・ハジャール(まるまる 5 万ルピー)」と言っています)、といった点です。接続詞 that にあたるヒンディー語の接続詞に「ke」と「ki」が混じるのは今の映画でも多いですし、歌の歌詞にも多く、また現実の話し言葉でもよくあります。今度、ヒンディー語が母語の方とお話になる時、両方使って通じるかどうか試してみてください。

【質問 48】 バサンティの自己紹介でハマラー？ を使っていて、これは尊敬している意味で複数形なのか気になった。又は方言なのでしょう？

【回答】 特に女性が、一人称を「マイン(私)」ではなく「ハム(私たち)」というのは、映画の中によく出てきます。あまり教育程度の高くない人がしゃべる場合が多いのですが、私は最初に聞いた時、自分の母語である関西弁を思い出しました。関西弁では女性の一人称が「うち」となる(「うち、そなんん知らんでえ」など)ことがあるのですが、時としてそれが「うちら」になるのです。「ら」は「等」のことで、「わしら」「俺ら」と言うように複数形になります。「うちら、そなんん知らんでえ」と自分 1 人を主語にしても使えるので、それとヒンディー語も同じなのかな、と思ったのです。

その後、ヒンディー語の辞書で「Hum(ハム)」を見てみると、「女性が単数の自称に用いることが普通に見られる。その場合、動詞の活用形は男性複数形を取る」とあって、これだな、と思いました。ラター・マンゲシュカル(1970 年の映画『Aan Milo Sajna(やって来て会って、いい人)』より)という歌があって、さよならを言う時に便利なので使ったりしていますが、やっぱり女性はきちんと、「アッチャー・トー・マイン・チャルティー・フーン」と言った方がいいようです。

【質問 49】 バサンティが 神様がしゃべった？！ の所でトゥムを使用しているのが気になった。

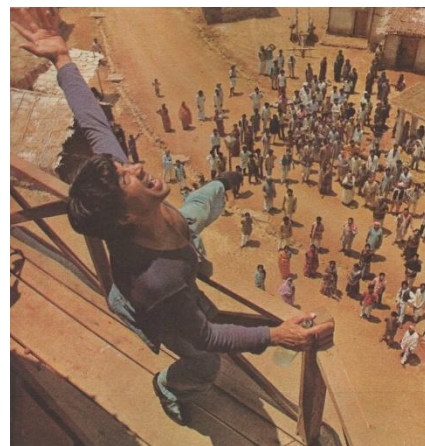
【回答】 バサンティがシヴァ神にお祈りに行き、つらつらと望みを申し立てている時、神像の裏に隠れたヴィールが声を変えて、「これ、娘よ」と言った次のシーンですね。確かに、「プラブ(神様)、トゥム？」と言っています。神様だから当然敬語の「アープ(あなた)」だと思っていたら、「トゥム(君)」だったので驚かれた、ということかと思います。それとも、「トゥー(お前)」でないのが気になった、ということでしょうか。もし後者なら、ヒンディー語をよくご存じで拍手、というところですか。「トゥー」は二人称ではいちばんぞんざいな言い方なのですが、それゆえにとても親しく親密な人に対してや、信仰している神様に対しての畏敬の念を表す時にも使われる二人称なのです。というわけで、バジャン(ヒンドゥー教の祈りの歌)の歌詞を見ると、「トゥー」「テラー」などの単語があふれています。

【質問 50】 相棒の1人が亡くなるシーンで、「आप ठीक हैं ?」(松岡注:アープ・ティーク・ハイン?/あなたは大丈夫ですか?)と तुम (同:トゥム/君)や तू (同:トゥー/お前)ではなく आप (同:アープ/あなた)を使っている気がしたのですが、敬意を表しているのでしょうか? まだヒンディー語歴が2ヶ月のため聞き間違えたんだったらすみません。

【回答】 ここは聞き直してみたのですが、一貫して「तुम」を主語としてしゃべっています。1年生の方で少しでも聞き取れたのはすごいと思いますが、残念ながら聞き間違いかと思われます。「अब (アブ/今)」という単語が挟まれたりしていたので、それが「アープ」と聞こえたのでしょうか?

【質問 51】 主人公が自殺しようとする時少し英語を使っていて、村の人たちがどういう意味? と言っているシーンがあったが、それは何かの風刺なのですか?

【回答】 村人は英語がわからない、というのを元にしたギャグで、風刺とまでは言えないと思います。日本人だって、「スーサイド (suicide)」と言われると、「それ、何?」と聞き返す人の方が多いのでは、と思います。私も、「アートマハッティヤー(ヒンディー語で“自殺”)」の方がよくわかります(笑)。



【質問 52】 市販の脚本本はもう買えないということでしたが、どこかで手に入ったりしませんでしょうか?

【回答】 たんねんに探してご覧になれば、出てくるかも知れません。私が買った時は、鉄道の駅の売店や街中の新聞&雑誌スタンドをインドに行くたびにチェックしたのですが、例えばデリーのヒンディー・ブック・センター(書店のサイトは下記アドレス)のようなヒンディー語書籍専門書店に問い合わせたご覧になれば、出てくるかも知れません。

<https://hindibook.com/>

【質問 53】 <アンケート用紙より>映画の台本の本が今あまり出版されていない、というのを興味深くおききました。Web 上にもあまり出ないのでしょうか。

【回答】 Web 上には、英語字幕台本はいろいろアップされています。ですが、ヒンディー語を始めとするインド諸語での台本はアップされているのは見たことがありません。ローマナイズ・ヒンディー語でもいいので、あるとありがたいのですが。英語字幕台本が見られるサイトのアドレスを 2 つ付けておきますが、他にもいろいろあります。

<https://www.scribepio/bollywood-movie-scripts/>

<https://www.filmcompanion.in/companion-zone/scripts>

《インド映画／映画界全般に関する質問》

【質問54】 なぜインド映画には歌って踊るシーンがあるのか？
又、いつからそういったシーンが作られるようになったかが気になる。ホーリー祭もいつから、口ゼ始まったのか気になる。



【回答】 インド映画だけでなく、アジア映画全体がそうなのですが、1895年12月にお披露目されたリュミエール兄弟によるシネマトグラフが自国に伝わった後、実際に映画を作る時になると、当時各国で盛んだった演劇が撮影されたり、それを改変した物語が映画化されたりしました。日本では、歌舞伎の演目が撮影されたり、歌舞伎の俳優が映画俳優となったりしましたが、日本の「歌舞伎」という言葉が代表するように、当時のアジアの演劇は「歌・舞・伎(演技)」が一緒になったものでした。そこから「映画」に発展して行っただけで、どこの国でも初期の映画は多くが「歌」と「舞」を取り入れています。そういった映画の歴史を知らない人は、「なぜインド映画には歌と踊りが？」と不思議がるのですが、日本映画『鴛鴦歌合戦』(1939)や、中国映画『木蘭従軍』(1939)等々を見ると、映画発達史の中で、伝統演劇の影響が強かった時代はアジアのどこの国も同様に歌や踊りの入った作品を作っていたことがわかります。

インド以外の国の映画は、テレビが発達していく1960・70年代には、歌が誕生する場が映画からテレビに移り、歌舞入りの映画はなくなっていきますが、インドはテレビの発達が遅かったため、その後も歌って踊るシーンは21世紀になるまで、数カ所挿入されるのが普通でした。インド映画はサイレント時代から、女性たちが踊ったり、クリシュナ神が笛を奏でたりするシーンが登場しており、1931年に映画がトーキー化すると、たちまち何十曲もの歌が入るようになったのです。その後、常に数曲入っていたソング＆ダンスシーンが、1991年以降の経済発展で映画の長さが短くなったことから、ダンスは2箇所ぐらいになり、歌の多くは劇中にBGMとして流されるようになりました。それでもインドの観客はソング＆ダンスシーンが大好きで、『RRR』が大ヒットしたのも、劇中の「ナートゥナートゥ」の曲とダンスが観客の心を掴んだことも大きかったのでは、と思われます。

ホーリー祭については、「南インドを知る辞典」には「起源は古く、文献ではさかのぼりきれないが、プラーナ文献にはすでに現在と変わらぬ風俗が描かれている」とあるので、5, 6世紀にはもう祝われていたのではないのでしょうか。春の訪れを祝う祭りなので、寒い時期がある北インド発祥ではと思われますが、多様な色粉・色水を掛け合うお祭りは万人に人気があります。

【質問 55】 なぜインドの俳優は国会議員になることが多いのでしょうか。

【回答】 日本でも名前が知られている人は、政党からのオファーがあつたりしますよね。それと同じで、インドでの映画俳優は知名度が抜群なので、政党からのオファーが多いのです。また、インド独立前から、映画人、特に南インドの映画人は政治活動に結構関わってきたので、その伝統が今も息づいている、ということもできます。ご存じかも知れませんが、タミル・ナードゥ州の歴代州首相は、独立後は半数が映画関係者ですし、その他の州でも俳優であると同時に政治団体を立ち上げたりしている人がたくさんいます。政治への関心がみんな高いですね。

【質問 56】 ボリウッド俳優達は自由恋愛が昔からあるようだが、世間的には良いのか、本人達のや親族的にカーストは気にならないのだろうか。

【回答】 おっしゃる通り、映画界で恋愛結婚をした人は初期の頃から何人もいて、サイレント時代からの人気女優デーヴィカー・ラーニー(・チョウドリー)は、1929年に監督・俳優のヒマーン・シュ・ラーイと結婚したあと1940年に離婚し、ロシア人男性と1945年に再婚しています。他にも国際結婚をした映画人がおり、映画界は初期から因習には縛られない人が多かったようです。また、特にヒンディー語映画界では、異教徒間結婚も多く、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の結婚も、現在ならサイフ・アリー・カーンとカーリーナー・カプール、シャー・ルク・カーンと妻ゴウリーなど、たくさんいます。本人たちの幸せが一番、ということで、映画人はそれを貫けるだけの地位にいる、と言えるのかも知れません。

【質問 57】 現代のインド映画では勧善懲悪ものが多く、今作られたならば SHOLAY のラストも悪役を殺して終わりとなったような気がします。年代によって、映画で撮られる勧善懲悪の考え方や法律に対する考え方の変遷など知りたいです。

【回答】 先に書いたとおり、『炎』は本来「ラストで悪役を殺して終わり」になっていたところを、検定局の指示で変わってしまいました。1970年代は、ラストでは「法の手に乗せなさい」と誰かが言って、悪人を殺さず逮捕させて終わり、ということが結構ありました。1980年代になると、ヒーローが直接殺すのではないものの、崖から落ちたりして悪人は死ぬ、というような結末が多くなります。1990年代になると、シャー・ルク・カーン主演作『賭ける男』や『Darr(恐怖)』(共に1993)のような、復讐者やストーカーが主人公になり、最後に死んでいく、といったように、アンチヒーローが主人公になる作品が出てきます。そして、正義の味方として描かれてきた警官像が180度変わったのが、「エンカウンター」という警察の手法が登場してからです。「刃向かったため仕方なく悪人を射殺した」という言い訳で、裁判にかけることなく悪人を平気で殺していく、という描写が始まったのが2000年代に入ってからだと思います。9月にSPACEBOXが公開するラジニカーント主演作『銃弾と正義』(2024)がこの問題を扱うようですので、ご覧になってみて下さい。なお、「法律に対する考え方の変遷」は論文なみのテーマですので、私の手には余ります。ご興味があればご自身で挑戦してみてください。

【質問 58】 今回の講演の中で、インドの人は映画の挿入歌を歌う時にアレンジして歌うのが好きといった旨のお話がありましたが、それはなぜなのでしょう？

【回答】 ジャズをお聴きになったことはありますか？ 一応楽譜はあるのですが、自由に即興演奏&歌唱ができるのがジャズですよね。インドの古典音楽もそうで、一応約束事はあるのですが、その時の気分や周囲の雰囲気等で、約束事の範囲内であればいくらでも変えていいのです。その素養を基に映画の曲挿入歌でも、ある箇所ではリズムや音程を変えてみたりして、自分らしく歌うのがインドの人たちなのです。元歌どおりにきっちり歌わなくては100点満点でない、と思っているのは日本人だけで、案外どの国の人でも自由にアレンジして歌っている、というのが、タイなどで地元の人のカラオケの歌を聞いた私の感想です。

【質問 59】 インド映画はピカレスクロマン的な作品はあるのでしょうか？ 私はゼロでしたがあ口ての映画を観て悪党の親玉に感情移入するインド人はいるのでしょうか！ 親玉が必要以上にイケメン俳優に見えたので。もしくは彼はインドではイケメンでない？

【回答】 ピカレスクロマンというか、悪漢が主人公、ヒーローとなる物語はインド映画にもあり、例えばシャー・ルク・カーンの『DON』シリーズはそれに近いのでは、と思います。あと、YRF(ヤシュ・ラージ・フィルムズ)の『Dhoom』シリーズは「泥警もの」なのですが、泥棒側の描き方がカッコいいので、あれもピカレスクロマンに近いかも知れません。その後のご質問は意味がよく理解できませんでした、すみません。

【質問 60】 重婚が OK なのがインドの法律的になのか宗教的なものなのか気になってしまいました…。

【質問 61】 ダルメンドルの重婚の話にとってもおどろきました！ 重婚ってありなんですか？

【回答】 インドでも重婚は禁止されており、刑法 494 条ならびに 495 条に基づいて、重婚罪で起訴されるそうです。しかしながら、刑事追訴の対象とはならず、保釈が認められる犯罪で、妻の同意と裁判所の許可があれば、和解となることがあるそうです。ダルメンドルの件は今回いろいろ調べてみると、「ムスリムに改宗した」と言っている、という記述もあり、それもあってうやむやになっているようです。ムスリムだと 4 人まで妻が持てるので、『炎』の脚本家の 1 人サリーム・カーンも 2 人の妻を持っています。最初の結婚は 1964 年にヒンドゥー教徒女性とで、彼女はムスリムに改宗し、サルマーン・カーンを始めとする 3 人の息子を産みました。その後 1981 年には、『炎』のアイテムガール(ダンスシーンのみのヒロイン)であったヘレンと結婚します。一家族はさらに養女も迎えて、とても仲がいいことで知られています。

《その他のご質問》

【質問 62】 外語大のヒンディー語講座は人気なのでしょうか。

【回答】私が受講生の方向人かに聞いた限りでは、白井桂先生、白井恵子先生のお二人とも、とても評判がいいです。私もお二人とは、知り合ってもう 50 年ぐらいになるのですが、お人柄の良さは保証しますし、お二人がデリーに留学していらした頃も、著名な俳優バルラージ・サーハニーのお兄さんである文学者のヴィーシュム・サーハニー氏を紹介していただいたりと、お世話になりました。単に語学だけでなく、幅広い文化知識が学べるクラスでは、と思います。

《松岡個人への質問》

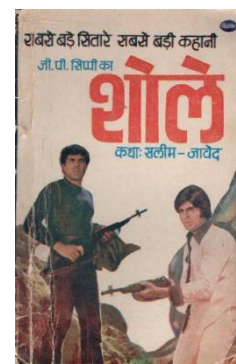
【質問 63】 先生がこの映画を翻訳することになった経緯は、どのようなものだったのでしょうか？



【回答】配信の JAIHO とは、以前からインド映画のコラムを書かせてもらったり、ヒンディー語映画の字幕の固有名詞表記チェックをボランティアでやっていたりしたので、担当者の方もよく知っていました。私が 1997 年の公開時に字幕を担当した『ラジュウ出世する』(1992)も配信されることになり、20 数年前の字幕を手直したのですが、その後に『炎』を配信することが決まり、字幕を担当しませんか、と声を掛けていただいたのでした。というわけで、ありがたくお引き受けしました。

【質問 64】 字幕制作の苦労話を伺いたかったです。

【回答】 英語字幕台本が届けられ、手元に脚本本(右写真)もあったので、特に苦労はありませんでした。ただ、脚本本が実は完成稿ではなかったため、実際には撮らなかつた部分、撮ったけれども編集で落とした部分が多々あり、それをチェックするのがちょっと大変でした。あとは、淡々と訳していった、という感じです。



【質問 65】 松岡さんの SHOLAY にまつわる思い出をもっと聞きたいです。

【回答】 トークの時言い忘れましたが、『炎』を日本の劇場で最初に上映したのは、1988 年の「大インド映画祭」でした。当時、インド政府は各国と協定を結び、「インド祭」をそれぞれの国で開催してもらって、インド政府が派遣した音楽家や舞踊手、映画などを楽しんでもらい、インドの文化を知ってもらう、という事業をやっていました。日本政府ともインド祭を 1988 年に開催する協定が結ばれ、映画祭も催してほしい、ということで、「ぴあ」が引き受け、私たちインド映画祭実行員会が全面協力しました。最終的に上映作 25 本を選んだのですが、その中に『炎』も入れたところ、来日したインド祭担当のインド政府高官が、「『炎』のような娯楽映画を入れるとはけしからん」と言い出したのです。そこで私が、「『炎』は過去インドで一番人気があった映画である。インドの人々が最も楽しんだ映画をプログラムに入れないでは、インドのことなどわからない」と演説をぶち(笑)、ラージ・カプールの『放浪者』(1951)、サタジット・レイの『音楽ホール(英題が”Music Hall”だったので当時の邦題はこちらに)』(1958)などと共に『炎』も上映しました。すると、吉祥寺の今はなき映画館バウスシアターで上映した時、インド亜大陸から来ていた人たちを筆頭に日本人観客も多数集まり、入場を待つ行列がサンロード商店街に長くのびたほどでした。政府高官とケンカしてまでも上映してよかった、とその時思いました。

【質問 66】 『炎』の 70 ミリ版をご覧になったことはありますか？

【回答】 残念ながらありません。当時のインドの劇場では、70 ミリ映写機を備えているところはなかったので、映画館上映はすべてシネスコ版だったと思います。

以上です。

《以下、次回からはアンケートにご記入下さいね》

【感想】 登録していたサブスクからも『SHOLAY』は消えていたので、スクリーンでしっかり見られてうれしかったです。インド映画では『伝説の女優サーヴィトリ』、ほかにもし可能であれば『青いカフタンの仕立て屋』(松岡注:モロッコ、仏、デンマーク、ベルギー合作)が観たいです。